ナイスの視線で、日常の楽しみをお届けする、西成発の地域情報誌 2024

Take free!

# なび

10月号
vol. 212

特集

# おとなの社会科

第17講 歴史 ── 有楽物語・後編

にしなりの街角・街並み
「三国志の英雄・関羽を祀った関帝廟（かんていびょう）」
太子2丁目3の16

# おとなの社会科

## 第17講 歴史 ―― 有楽物語・後編

昔、使った教科書をパラパラめくってみると、あの頃には気づけなかった面白さがみえてきた――そんな経験はないだろうか。学校の教科書は昔と同じではない。だから、大人になってからの学び直しも決してムダではないはず。学校に通ってた頃を思い出して、もう一度、目の前に広がる社会を学び直してみませんか。

有楽苑の如庵。茶人・有楽斎の集大成となる名茶室である。左の建物は有楽斎夫婦が隠居所に使った旧正伝院書院

### 利休の死

織田長益が有楽斎を名乗った翌年の、1591年1月。有楽斎は豊臣秀吉と連れ立って千利休を訪ね、三人で茶と料理を楽しんだ。この時がおそらく、有楽斎が利休と共に過ごした最後の時間だっただろう。

利休が何らかの理由で秀吉に切腹を命じられるのは、それからわずか一か月後のことであった。京に大雨が降った日、70歳の利休は聚楽第の屋敷で自らその生涯を終える。

この頃の有楽斎は秀吉の御伽衆と茶頭を務めるだけでなく、秀吉の側室である淀殿の後見役という立場でもあった。淀殿は有楽斎の腹違いの姉〝お市の方〟の娘で、二人は叔父と姪という関係である。1592年には世継ぎとなる秀頼を懐妊。紹鷗森天満宮には、秀吉が安産祈願のため参詣し、淀殿も出産後にお礼参りに訪れたという言い伝えが残っている。

秀吉が1598年に死去すると、徳川家康と石田三成の間で実権争いが始まり、1600年に「関ヶ原の戦い」が起きる。有楽斎は長男の長孝と共に、家康方の東軍から参戦。少数の兵ながら奮闘し、光成の重臣である蒲生頼郷の首を取った褒美として、家康から大和国に3万石の領地を与えられた。

有楽斎が戦で手柄を立てるのは珍しく、周囲からは最初で最後の首などと皮肉られた。また、江戸時代初期の『慶長見聞集』には次のような話もある。有楽斎が関ヶ原の戦場を呑気に馬で歩いていると、頼郷に見つかり背後から斬りつけられた。しかし運良く間一髪で反対側に落馬。そこへ家来たちが駆けつけて頼郷を討ち取り、首を有楽斎に持たせたのだという。

### 戦国の終わり

天下分け目の戦で勝利し覇権を握った家康は江戸幕府を開くが、豊臣家も大坂で依然として強大な権力を持っていた。家康は豊臣家の力を削ぐべく様々な政策を行い、その過程で両家の対立が徐々に深まっていく。

有楽斎は豊臣家の重臣でありながら家康に仕える立場でもあったため、対立する両家の仲介役としての役割を担った。この頃には天満橋付近に構えた別邸から大坂城に出入りし、淀殿と秀頼を補佐しながら、豊臣家の動きを家康に逐一報告していたという。

穏健派の有楽斎は両家の衝突を避けようとしたが、1614年の冬に「大坂冬の陣」が起きる。この時は有楽斎らの交渉もあって一旦は和平が成立。しかし年が明けると再び緊張が高まり、大坂城で兵糧や兵士の準備が始まる。

再戦が避けられないことを悟った有楽斎は、家康に「誰も私の意見を聞いてくれないので、城内にいても意味がない」と言い残して大坂城を立ち去り、そのまま京に隠居する。1615年春のことであった。

その後間もなく「大坂夏の陣」が開戦。徳川勢は大坂の南側から進軍、家康の息子である松平忠輝や伊達政宗らは、勝間村の紀州街道沿いに陣取った。豊臣勢とは天王寺付近で激戦となり、天下茶屋の一帯でも多くの死者が出たという。

現在、天下茶屋駅近くに地域の守護神として祀られている苔山龍王は、元を辿ると徳川家光の時代に建立された大坂の陣の慰霊碑が発祥である(①)。

5月7日の夕刻、大坂城は猛火に包まれて落城。淀殿と秀頼は城内で自害し、栄華を誇った豊臣家は滅亡の時を迎えた。当時、有楽斎がいた京の市街からも、一晩中燃え続ける大坂城の火炎が見え

天下茶屋の苔山龍王。命名の由来はかつての町名が苔山町だったことによる

たという。

## 京での日々

大坂の陣は終結し、嵐のような戦国の世は過ぎ去った。家康は天下泰平の訪れを見届けると、1616年に病で死去する。京で新たな暮らしを始めた有楽斎は、関ヶ原の戦いで家康に拝領した3万石から、四男の長政と五男の尚長に1万石ずつ分け与えて織田家を継がせ、残りの1万石を隠居料として手元に残した。

1618年には荒廃していた祇園の正伝院を再建。隠居所を設けて妻と二人で移り住んだ。同時に「如庵」という茶室を作り、心の師として慕い続けた武野紹鷗の供養塔を堺から移転させる。その後は茶の湯と読経に明け暮れる平穏な余生を送り、1622年に75歳でこの世を去った。

有楽斎の茶法は息子たちから世代を超えて受け継がれ、有楽流として現代に存続している。正伝院の如庵は愛知県犬山市の有楽苑に移築され、現在は国宝として保存されている(②)。有楽斎が作った茶室は他にも残っており、横浜の三溪園には「春草廬」という茶室が京の宇治から移されている(③)。

③
三溪園の春草廬。江戸時代初期の建築で、国の重要文化財に指定されている

有楽斎の茶室は、光の茶室である。細い竹を打ち詰めた如庵の有楽窓は有名で、陽光が虹のように輝いて室内に映り込む。春草廬には9つもの窓があり、九窓亭という別名がある。晩年の有楽斎は、利休が好んで作った狭く薄暗い茶室を、客を苦しめるだけと批判していたという。客を居心地良く、窮屈な気持ちにさせないことが有楽斎の第一の教えだった。

織田家の十一男だった有楽斎。しかし、兄弟のほとんどは若くしてこの世を去っている。七男の信興と九男の秀成は、一向一揆衆との抗争で戦死。どちらもまだ20代だった。五男の信治は浅井・朝倉連合軍との戦で自害、享年26。唯一の弟だった十二男の長利も、30代前半という若さで、本能寺で信長と共に火の海へと消える。そしてお市の方も淀殿も散って、最後にたった一人生き残ったのが有楽斎なのだった。

武士という修羅の世界に生きた有楽斎にとって、茶と向き合う時間だけは、生きることが楽しいと思えたのかもしれない。有楽斎が長い人生の最後に辿り着いた茶の湯とは、有楽という名前の通りの「楽しみの有る茶の湯」だった。

## 茶人たちとの夏

堺にもかつて有楽町があったと知ったのは、横浜の三溪園から帰ってしばらく経ってのことである。現在の堺区宿院町の一部が、江戸時代から明治初期まで有楽町という町名だったという(④)。

この地には有楽斎から茶人の今井宗薫に譲られた屋敷があった。有楽斎は各地に別邸を持っており、ここもその一つだったようだ。宗薫はかつて利休と共に信長の茶頭を務めた今井宗久の息子である。

目と鼻の先には紹鷗と利休の生家跡もあり、侘び茶が堺の狭い町内から全国へと広がっていったことが分かる。しかし、最先端の文化が花開いた国際都市としての堺も、今は昔である。

時は流れて、8月半ばのある晴れた昼下がり。東京駅のホームに降り立つと、屋根の向こうに夏らしい真っ青な空が広がっていた。赤レンガの駅舎を出て線路沿いの道を南へ歩けば、隣駅の有楽町

④
堺の旧・有楽町。今井屋敷跡の碑が立つ以外は、ごく普通の街並みが広がる

までは10分もかからない。

有楽町駅近くの大通り沿いに、千代田区の町名由来板があった(⑤)。説明文によると、有楽斎が関ヶ原の戦いで手柄を立て、家康からこの地に屋敷を与えられた。その跡地がやがて有楽原と呼ばれ、明治初期に有楽町と名付けられたのだという。

この話は江戸中期の『再校江戸砂子』という地誌に書かれているが、実際に有楽斎が江戸に暮らしたという記録は残っていない。また、この辺りは江戸に幕府が開かれるまでは遠浅の海だったらしく、当時は埋め立て中で屋敷を構えられるような土地ではなかった。こうした理由から、この話は伝承の域を出ないというのが定説のようだ。

有楽町の東隣に数寄屋橋という地名がある。数寄屋とは茶室のことで、江戸時代の初め、ここに「数寄屋町」という江戸城に来る大名をもてなす茶人たちが集住する街があったという。有楽斎の屋敷の話も、あるいは数寄屋町に暮らした茶人の誰かが言い出したのかもしれないが、それも今となっては誰にも分からないことである。

有楽町から日比谷を通って、陽炎が揺れる皇居前広場に足を踏

⑤
東京の有楽町。奥の数寄屋橋・銀座方面へとビル街が途切れることなく続く

み入れた。ベンチに座って茶を喫するが、自販機で買ったペットボトルではどうにも風情がない。今日はお盆の初日に当たる。こうして真っ白な日差しの中に座っていると、今にも陽炎の向こうから、この世に還ってきた有楽斎が姿を現しそうである。

〝鳴かぬなら　生きよそのまま　ほととぎす〟

ある本の中にあった、有楽斎の生き方を表す言葉である。本能寺の変での悪評から「逃げの有楽」「逃げた男」と呼ばれながらも、武将らしく生きようとせず、勇ましく死ぬことを潔しとせず、最期まで茶に命を燃やした。与えられた生を全うした有楽斎のことを、「逃げた男」ではなく「生きた男」として記憶に留めておこう。

そう思ってふと空を見上げると、遠くに茶菓子のような雲が流れていた。

文責：福井龍磨

# 楽塾 遊び編 12

あそびを学び まなびを遊ぶ 新しい学校の冒険

毎週土曜日開催の楽塾は、24年夏に開塾17周年を迎えました。楽塾の理念は〈あそびを学び、まなびを遊ぶ。新しい学校の冒険〉。様々な地域や場で多彩な居場所づくりに汗する人々への参考にと、これまでの〈あそび〉を隔月連載で紹介しています。

## いめたしへようせれじわ

### 元号

7世紀半ば、中大兄皇子らの蘇我入鹿暗殺は蘇我氏を滅亡へと誘い、天皇を中心とした律令制や公地公民制など、中央集権体制の国家へと促します。大化改新以降「古事記」「日本書紀」などの編さんもはじまり、「日本」という国号もこの頃誕生したのでしょう。

元号は天皇の生死に関係なく、代替わりや、天変地異、凶作などの自然災害、大事件、日常の様々な事象変動に応じ改められますが、明治時代以降は、天皇一代一元号（天皇が死ぬまで元号は不変）となり、明治天皇の在位は45年、大正天皇は病死で15年、昭和天皇は63年、平成天皇は任意退位で30年間の在位です。明治以降の天皇は、それ以前の天皇より、歴史的に在位年数が圧倒的に長いのです。

ゲームは『明治』を出発点とし、『大正』『昭和』『平成』『令和』まで5元号名をテーマに作成してみました。

### アタマ&おしりゲームの開始

『めいじ』からはじめ『れいわ』まで、元号のアタマとおしりを使い、短文を作成してシリトリ風に遊ぶゲームです。まず7頁表の「アタマとおしりで遊ぶシート」をA4判サイズでコピーし、参加者へ各1枚ずつ配布します。白紙部分は各自の解答文を書き込んでもらうためです。表を見ながら『めいじ』から始めます。

『めいじ』のじを『たいしょう』のたにつなぐ短文を考えます。例文では「じてんしゃののりかた」「じかんのむだ」で『たいしょう』のたにつながります。次は『たいしょう』のうを『しょうわ』のしにつなぐ短文を考えます。「うれしはずかし」「うわさばなし」で、しが『しょうわ』のしにつながります。『しょうわ』のわは「わたしからきみへ」「ワインののみくらべ」のへ（またはべ）が『へいせい』のへに。そして『へいせい』のいは「いきぎれ」「いかやきおくれ」のれが『れいわ』のれにつながりました。

まだ安心は禁物！『れいわ』を『めいじ』につなげてやっと完成です。ここでは「ワカメ」「わきめ」が『めいじ』のめにつながります。これでやっとひと回りできました。

『めいじ』から『れいわ』までの元号をテーマに、何度でもみんなと遊んでみてください。

アタマとおしりで遊ぶシート

| 1868年～（明治年間）➡ | 1912年～（大正年間）➡ | 1926年～（昭和年間）➡ |
|---|---|---|
| めいじ じてんしゃののりかた じかんのむだ | たいしょう うれしはずかし うわさばなし | しょうわ わたしからきみへ ワインののみくらべ |
| | | |
| 1990年～（平成年間）➡ | 2019年～（令和年間）➡ | 1868年～（明治年間）➡ |
| へいせい いきぎれ いかやきおくれ | れいわ ワカメ わきめ | |
| | | |

### ●参考編／ケッサク、オモシロ集

「明治と大正」の間を結ぶ言葉⇓「じごくのさた」「じげんばくだんみつけた」。「大正と昭和」の間を結ぶ言葉⇓「ウマのようなウシ」「ウカレタわたし」。「昭和と平成」の間を結ぶ言葉⇓「わふうカナッペ」「わすれものはこちらへ」。「平成から令和」を結ぶ言葉⇓「イカとカイワレ」「いしづくりのトイレ」。「令和と明治」を結ぶ言葉⇓「ワンタンするめ」「ワかれメ」（以上は豊中塾で発案されたアイデアの一部です）。

えと文：楽塾 佐々木敏明

[沖田一志]以前は予約が不可能だったキャンプに電話すると連休直前なのにあっさり予約できた。キャンプブームが終わったことがニュースになってるのは知ってたけど、本当だと実感できた。

[磯拓哉]9月に入っても暑さは変わらず夏バテ防止にと嫌いだった梅干しやお酢を取り入れるようになった。効果があるのかはわからないですが気が付けば食べれるものが増えました。

[田岡秀朋]まさかのチャリで赤キップ。警告との線引きが周知不足で納得できないとダダをこねてみたが、ダメだった。10月からは強化月間らしい。気をつけよう。

[笹川勝正]最近知って超便利だったアプリ「Hanabi-Navi」。花火が禁止されていない公園をナビ機能付きで見れる。しかも公園の写真付き。おかげで楽しく安心して花火ができました。

毎月隔週のクッキングのレッスンで、年中さんがプリンマフィンを作りました。材料のプリンをつぶして、油とホットケーキミックスを混ぜたら、マフィンの型に入れてオーブンで20分。完成が近づくといい香りがスクールに広がり…。みんな、できあがったマフィンを美味しそうに食べていましたよ。

GCC Kids International School

大阪市の住民参加型地域組織「地域活動協議会」の活動に橋を架けよう「近ツ橋【ちかつきょう】」

# 近ツ橋

## 敬老の日の集い（長橋）

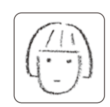
敬老の日は１９４７年９月15日に兵庫県多可郡野間谷村が主催した「敬老会」から始まったとされている。今回は長橋地活協で毎年実施している「敬老の日の集い」を取材した。

開始前からボランティアのみなさんは昼食の準備に大忙し。出演者もリハーサルを行い準備は完了し、いざスタート。今年の舞台イベントのスタートを飾るのは手品である。娘さんをアシスタントに様々な手品を披露。続いては、大きな人形を片手に腹話術。全く口が動いていないのはいつ見ても感心する。

休憩時間には、昼食に赤飯とおすましに漬け物がふるまわれる。そして最後のメインを飾るのは地域の福祉法人の職員やナイス社員らによるバンド演奏だ。北島三郎の「まつり」では、みんなが団扇を持ち「まつりだ！まつりだ！」の大合唱で会場は大盛り上がりだった。

お客さんの入りも初めはまばらだったが途中から席が足りないほどの満員に。今年も多くの方に喜んでもらえたイベントになった。

[西田吉志] 福岡県北九州市で立ち上がっている「希望のまちプロジェクト」。孤立する人がなく誰もが「助けて」と言えるお互い様(助け合い)のまちづくり。僕たちが実現を目指して実践していることと共通するからこそ応援したい。



[谷口円]「サボらず集中して仕事する」。自宅仕事の難しいところですが、10年の試行錯誤の結果、やっと少しできるようになった気がします。結局「体力・体調・整理整頓」がすべての土台という結論。



西成の地域を忙しく走り回る日々を送るおかん。仕事で出会った人びととの生活の一コマをため息まじりにつぶやきます。

※本文は関係者各位の許可をとって掲載しています。

# おかんのため息

●おかん はぁ…。ちょっと前に「敬老の日」あったやろ。

◆息子 そうやなぁ、なかなか暑かったけど。

● すごい元気なおばあちゃんが一人暮らししてんねんけど、なんと92歳！

◆ それはすごいな。

●『朝日新聞』の「天声人語」を書き写して、写経をして。近くのグラウンドを2周歩いて、ラジオ体操して帰ってくるって生活。

◆ 多趣味やね。

● 最近はカラオケにも週1回行ってた。ラジオ体操が終わってまっすぐ帰らんと、仲間たちと一緒に喫茶店に寄って、モーニングして帰ってくる。

◆ よろしいやん。

● すごい元気。ひとつは、娘が20年前から毎朝電話で会話してたからやろな。

◆ ほう。

● コロナに罹ったときも「調子悪いなぁ」って一人で病院に行って帰ってきてた。娘にも電話で「コロナやから来るな。大丈夫や」っていうほど気丈な人。でも心配で電話したら、「もう5日経って大丈夫やから、今日は体操に行ってきた」って。信じられへん！

◆ ん、その話なんか聞いたことあるな。おばあちゃんのこと？

● そう、〝おかんのおかん〟や（笑）私は三女で、毎日電話してたんは、長女。

◆ そうかと思った。で、なんで体操に行ったん？

●「じっと家をおったらおかしくなるから、体を動かさなあかん」って。でも気になって家に行ってきたら、冷蔵庫に食べ物がいっぱい入っとって。「なんで？」って訊いたら、体操仲間とか喫茶店のママが持ってきてくれてたみたい。あの人、すごいで。

◆ なんか「見守り」みたいになってるな。

● でも、最近ちょっと調子が悪くなって、コロナに罹ってからガクッと落ちた。

◆ あら、そうなの？

● 後日また、私の携帯に連絡があって、今度は「便が出ない」。結局、脱水と貧血。気丈なんやけど神経質で弱いところもあって、何かが気になったらそれが頭から離れへんねん。

◆ なんで脱水に？

● しんどくて、あまり食べてなかったみたい。他にもいろんなことが重なったのかも。とくに、便が出ないことはすごい気にしてて。「一日ぐらい大丈夫やろ」って慰めても、気になって仕方ない。

◆ ふぅん。

● でも看護師さんと話して点滴を打って、私の自宅に戻ってきたら、すぐにトイレに入って「スッとしたわぁ」って出てきた（笑）

◆ よかったね。

● こんなかんじで気弱なところがよく出るようになってきたわ。趣味もほとんど辞めて、残ってるのはカラオケとラジオ体操。

◆ なんで？

● 友だちが誘ってくれるねん。毎日行かれへんようなってんけど、友だちのグループLINEで「今日はどうしたん？」って連絡が入る。

◆ なんや知らんけど、ここでも「見守り」みたいなんがあるな。

● 見守りについては三姉妹でもいろいろ話してる。職業柄、意見が食い違うこともあるけど、「おかん」の生活全般を見渡した見守りが必要やと思う。地域の仲間づきあいもそう。「おかん」の生活のリズムはちょっとずつ変わってきてるから「常に三人三馬力で、お母さんのことは守ろう」って思ってんねん。

[安田拓也] 好きなこととの距離感　その接点は多い程良いというが、こんを詰めると停滞が来て嫌になることも。あの日の新鮮さを取り戻すため、その日どう終わらせるか、片付け方も大事なんだと思った。

[福井龍磨] 6年前に育て始めた多肉植物たちが、いつの間にか大きく成長した。赤井まゆみさんが今月号の「葉っぱの吐息」で、物言わぬ彼らの声を素敵な詩に仕上げてくださった。心より感謝申し上げます。

# 葉っぱの吐見（といき）

私は草木が大好きです。とくに観葉植物には心癒されます。私と葉っぱとのお喋りを聞いてください。

東京を離れる時に友が持たせてくれた植物。この植物を見るたびにその友を思い出す君。

## 「思いを告げる葉っぱ」の巻

君と暮らして6年になるわたし。
なんど引っ越ししたかしら。
君と出会った時は親指ほどの小さなわたし。
今は大きくなりすぎて困らせてるかしら。
君と居ると楽しくて仕方がないわたし。
だからときどき花を咲かせてしまうのかしら。
君とお喋りすると落ち着いてしまうわたし。
たまに居眠りしてしまうのはそのせいかしら。
君と会えない時間が淋しいわたし。
だけど我慢できるのは幸せだからかしら。
君といつまでも一緒にいたいわたし。
そのことばかり考えてしまうのはどうしてかしら。

赤井まゆみ

# 皮算用 胸算用

にしなり隣保館の館長が日々の出来事について胸のうちで皮算用していることを語っていくよ。

兵庫県知事のパワハラやおねだり疑惑について、百条委員会の審議を得て今後どうなるか、連日報道され注目を集めている。

今回の事件のポイントは、文章の一部を誹謗中傷と捉えそれに激怒した知事が「公益通報者保護法」を無視し、県庁の役員に犯人探しの指示をしたことにある、と私は思う。また、こうした事態を招く要因として、権力の集中や行政内部の仕組みに関する悪しき慣習もあったのではないか。本件では職員が亡くなるという異常な事態が生じている。知事をはじめ兵庫県庁の副知事や幹部の責任をはっきりさせないといけない。

組織や職場で働く人たちの人権を守る考えや仕組みがあれば防げたのではないか。社会の中の人権を基本に考える仕組みを構築したいものだ。

（寺本良弘）



# いい湯かげん

## 哀悼！ 大賀正行さん

先頃死去された大賀正行さんへの哀悼を『なび』誌にも記しておきたい。晩年、おつれあいの大賀喜子さんにも、幾度も『なび』を楽しみにしていると語りかけていただいた。おこがましいかもしれないが、大切な読者だった。

大賀さんは壮絶な部落差別の体験者だった。弟の山中多美男さんと姓が違うことに象徴される複雑な生育環境も部落差別そのものだった。極貧の境遇から北野高校、大阪市大に進学された苦労人で、子ども会を作ることから部落解放運動を始められたこともあって、戦後の焼土の部落の人々、とくに青年たちの希望だった。松田喜一さんなど大阪市同和事業促進協議会（市同促）の大幹部のおじさんたちに混じって役員になった大賀さんが、なんと学生服姿であった写真は、ボクの脳裏に焼きついて離れない。

大賀さんは終生変わらぬ理想家だった。大学生の頃から社会主義、マルクス主義に傾倒された。市同促大幹部だった松田さんに、「市同促は大衆の要求を抑えている」と論争を挑んだのは20歳前後の頃だった。そして、部落に要求組合を次々と組織して闘った。

圧巻は、論敵松田さんが亡くなられた後、松田さんと同促協の先見を知るや、猛然と解放同盟と同促協の両輪による運動論を打ち立て、同対審答申を得て解放運動の最盛期を築かれたことだ。大賀さんは、言葉にはしなかったが、明らかに要求組合運動を「小革命運動」、同促協による部落の自治を「小社会主義」と見立てておられたと思う。「派遣村」の湯浅誠さんや「コモン」の斎藤幸平さんらも注目されていた。

しかし、社会主義のモデル・ソ連は崩壊し、同和事業も紆余曲折した。大賀さんもゴルバチョフの新思考を熟考するなど、苦悶し葛藤された。それでも大賀さんは理想家であり続けた。晩年、社会主義の失敗、同和事業の曲折に苦悶され、孤独に耐えておられていたように、ボクは感じていた。

大賀さんは、日本共産党の介入と闘い続けた。理想家大賀青年は当然のように日本共産党にも入党したが、間もなくして日本共産党は部落解放同盟と対立し、同対審答申を巡る論争は抗争に至った。青天の霹靂の党と大衆団体の抗争の渦中、大賀さんは堂々と日本共産党を批判し解放同盟を守った。

以来、日本共産党は部落解放運動の中の、それも大阪の小グループでしかなかった大賀さんたちを、「日本のこえ一派」と名指しで攻撃した。ボクも、同年代の運動の仲間も、内容より手口に絶望した。しかし、不思議な発見があった。そうか、マルクス主義とは、いや主義にかかわらず理想家或いは運動家とは、縁の下でこそ活動するものだと。理想はそう引き継がれた。ボクは、大賀さんの最大の功績は、縁の下での活動を堅持したことにあると思う。

西成支部が『詳伝松田喜一』を編んだのは、大賀さんの遺言のような提案からだった。大賀さんは、晩年まで松田さんの同促協論を深め続けておられた、悔悟の念と共に。愛すべき指導者だった。

冨田一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。

[若松司] 年齢を重ねるほど、他人の指摘や意見、忠告が受け入れられなくなっていくもの。しかし師匠は他の意見を取り入れて自らの研究を更新されていく。自分も省みねば。

[山村裕太] なぜか「新しい学校のリーダーズ」にプチハマりしてしまいました。YoutubeのAIが「あんたコレ好きやろ？」とオススメに出すので、気付いたら見てしまっています。

地域の縁を心でつなぐ

# 松向寺さんの心の時間

高校生の時に、両親を病気で相次いで失った知人がいます。彼にお金はなく、妹が一人残されました。妹を大きくすることを人生の第一に考え、高校を退学し、寝る時間を削って働きました。妹も遊びたい盛りなのに、洗濯、掃除、食事の準備の全てを引き受けました。

時が過ぎ、現在、幸せな家庭を営んでいる彼は「両親を失った悲しみは尽きないが、両親を失ったおかげで真面目に生きる道を選び、両親が仏様となって支え続けて下さったおかげで、今の暮らしがあることを感謝している。」と言います。

「両親を失ったおかげ」の言葉の奥には、他人には想像もつかない「悲しみ」と「苦しみ」が秘められているのでしょうが、それらに圧し潰されることなく、「真面目」に生きる道を選び、「感謝」に転換させたのです。

夏目漱石は『ロンドン留学記』に「真面目に考えよ。誠実に語れ。摯実（しじつ）に行え。」と記しています。百年余り前の漱石の「真面目」という言葉が、現代の私たちにとっても大切な言葉として心に響いてきます。

松向寺　通法

写真は人生の一部が映ったもの。ここは思い出や自慢の1枚を少しご紹介するコーナーです。

# ワタシの1枚

『プールか海か？』

夏休みの子どもとのお出かけ写真。
猛暑の中遊び尽くして最後は涼を求めて水辺へ。
プールと海、どちらにするか悩んだ結果、
綺麗なプールで泳ぎながら海の景色も楽しめるところへ。
スイスイ泳ぐ子どもを見て成長を感じる夏でした。

（編集スタッフ 笹川勝正）

smile ゆ～とあい
にしなり隣保館

にしなり隣保館「スマイル ゆ～とあい」は、地域コミュニティ全体が抱える課題の解決をめざす民設民営の福祉施設です。日々悩んでおられる困りごとはありませんか？お悩み解決のためにできることをいっしょに探しましょう。

なび 10月号（vol.212）
発行日：2024年 10月 1日（創刊日：2007年 1月 1日）
発行：株式会社ナイス
住所：大阪市西成区長橋 3-6-33
電話：06-6563-1150
E-mail:info@nice.ne.jp
url:https://www.nice.ne.jp/

編集長：西田吉志
編集：磯拓哉、沖田一志、笹川勝正、田岡秀朋、福井龍磨、安田拓也、山村裕太、若松司（あいうえお順）
イラスト：hidarimaki、西井亜花梨
デザイン：谷口円

（株）ナイス
ホームページ